習うより慣れよ？

アルエ

出会いは春の嵐と共に。最悪は夜の星と一緒に。

「このたびは、聖華学院高校に入学おめでとうございます。これから君達はこの学校で
　勉学や運動に励み、そしてよりよい人になるべく学校生活を送ってほしいと思います・・・・」

かったるい。長い。つまらない・・・・・ふぁぁぁっぁ・・・これで１３回目のアクビ。
隣の子もさっきから携帯いじってるよ。前の子なんて、船漕いでるよ・・・・・・。
私も眠いけどさぁ・・・・ふあぁぁっぁ・・・１４回目のアクビが出た。

私の名前は、日向　未散（ひなた みちる）。
この春高校一年生になりました。
晴れてこの高校に入学することになったわけだけど、まだ友達は出来てない。
といっても今日が入学式なわけだから、出来ている方が素晴らしいと思う。
同じ中学の子もいないので多少、心細いわけなんですが新しい気持ちでやれるというのは
かなり新鮮で、さっきからニヤけてます。他の人が見たら「変な子だなぁ」と思われてるでしょう。

「では、続きまして学園長・三田運吉からの挨拶です。学園長、お願いします・・・」

また、長い話だろうなぁ・・・・あー何時までだっけ？入学式・・・・・・・・・・・・・え？
学園長・・・アフロ頭ですか？しかも、スーツの下に着ているのはジャージ？？？

「えーっと。話すことないんですよねぇ、とりあえず入学オメデト！！」
その言葉と共にクラッカーを鳴らす。そして笑顔で退場していった・・・・凄すぎ。
教員全員が呆然と学園長を見つめる、生徒もどういった反応をしめせばいいのかわからずに
止まったままだ。こんな学校で３年間やっていけるか少し心配になった。

式が終わり、クラスに戻る時にちょっと怖そうな女の子に目がいった。
背は高めで細い。目はキリっとしていて・・・・うわっ・・・目が合った。
って、こっち来るし！！うわーーーーー怒られるっ・・・・。
「ねぇ。私と友達になりたいんでしょう？」
「え？・・・・・あ、ハイ」
なりたいんでしょう？って意識過剰じゃぁないかい？？
「私、佐藤愛果。めぐって呼んでよね」
「あ、はぁぁ・・・・。私は日向未散。ミチルでいいよ」

以外に気さくな子でよかった。ちょっと一安心。

この学校は、部活動に結構力を入れていてその次に勉強といった変わった学校なのだ。
よって新入生はとりあえず、何らかの部活動をやらなければならないのだ。
面倒だけど、２年になったら辞めてもいいので案外気楽に入れるらしい・・・。

「んーーーミチルは何かやりたいのってある？」
「え？あーーーそうだなぁ。おもしろそうなのがいいな」
「おもしろそうなの？漫才部とか？」
「えぇっ？？それはちょっと嫌かも・・・文化系の方がよさそうかな」
「漫才部も文化系だよ？私は、かっこいい先輩がいる部活がいいな」
「また不純な入部希望だね。でもかっこいい先輩とかいいね」
門までの道を歩きながら、話していた。演劇部、書道部、美術部、科学部・・・・・数はたくさん。
でも、どれものぞいてみたけれどいまいちだった。

そんな風に困りながら歩いているとふとメグの足が止まった。
「ねぇ、さっきから何か聞こえてきてない？」
「そうかなぁ・・・・あ、確かに聞こえる。なんだろう？」
「もしかして、これってクラリネットじゃないかなぁ？」
「吹奏楽部？覗きに行ってないよね？えーっと南校舎５Ｆの第３音楽室だって」
「行ってみる？」
「うんっ！！」

今まで歩いていた道を引き返し、南校舎５Ｆへと急ぐ。
さっきまで聞こえてきていた、クラリネットの音がどんどん近くに聞こえてきてた。
しかし、音楽室の前ら辺で音がプツリとやんだ。
第３音楽室の扉の前で、私とメグはちょっと立ち止まっていた。
「ねぇ、ミチルが開けてよ。にしても誰もいないのかな？音が聞こえない」
「え？なんで私が？みんな帰っちゃったんじゃない？」
「そうかなぁ？明日にしよっか」
「そうだね、今日は帰ろう」
と扉を前にして、帰ることにした私達。またもや来た道を戻ろうと振り返ったら、人が立ってた。
「うわっ・・・・」
二人して驚きの声をあげる。右手にはクラリネット・・・・。
「もしかして、さっきまで吹いていた人ですか？」
とメグが恐る恐る聴く。
「あぁ・・・あんた達は何してんの？うちの部活に用？」
「え・・あ、はい。どういう部活なのかなぁ～と思って・・・でも誰もいないみたいなので
　帰ろうかと思ってました。」
「誰もいない？んなわけねぇと思うけど」
といいつつその人は、ドアのノブを回し扉をあけた。

「ウェルカーーーーム！！！麗しの新入生！！！！！！」
微妙な空気が、その瞬間流れた・・・・。
「部長・・・・その格好は何ですか？新入生も寄り付かないですよ？」
と言って奥の方へと彼は行ってしまった。
「部長さん・・・なんですか？えっっと・・・・１年の佐藤っていいます、体験入部に来ました」
「んんっ？？いいねぇ～体験入部！！！体験せずにいきなり入部しないかい？」
「それはちょっと・・・他の部活も見たいし、ねぇ？」
「そうだね。」
「そちらのお嬢さんは？お名前教えて下さいな」
「あ、はい。１年の日向未散っていいます」
「かぁぁぁいい名前ね。そうだ、さっそく楽器吹いてみない？」
なんでこの人、おかまキャラなんだろう？今、流行っているからでしょうか？
さっきの人が私はどこかで見たような気がして、でも思い出せなくてずっと彼のことを
凝視してました。家の近くで見たことあるんだけどなぁ・・・・・どこでだっけ？

と、ジーーーと部長さんの話なんか耳に入らないでその彼のことを見ていたら、急に寄ってきて
「おい。日向って言ったけどあんたどこに住んでるんだ？」
と聞かれた。
「住んでるところですか・・？北知久ですけど。それが何か？」
「やっぱり、どっかで見たことあるなと思ったんだ。お前、小さい頃俺の事指差して
　『番長』って言って逃げたガキだろう？」
え？番長？？何よ、それ。・・・・でもなんか見に覚えがあるような・・・。

「あ！！！隣の都築の長男！！って・・・あ、すみません・・・・・」

思い出した。

彼は私の家の隣に住んでいる都築さんの長男で庵さん。
昔から彼は「不良」だとか「番長」だとかっていわれていた。私が小学生の時、彼にはじめて
会った時にその「番長！」と言って逃げたことが一度だけあった。
まさか、そのときのことを覚えているとはねぇ・・・・。信じられない・・・・・・。
「やっぱりな。なんでここにいるんだよ？」
「え？いちゃいけないんですか？？」
半分逆ギレの口調で言い返した。横から、黒髪ストレートの人が出てきて仲裁に入ってきた。
「都築君、新入生にケンカ売ってどうすんのよ？そんなに気になるの？」
とちょっと企んだ感じな口調で、話した。そして私に対して、
「あなたも、彼の言葉に動じちゃダメよ？まだ彼はおこちゃまなんだからね」
「あ、はい。すみませんでした」
くすっっと笑うと、彼にちょっとキツイヒトコトを耳元で言って奥へと行ってしまった。

部長さんにいつの間にかつかまっていた、メグが私のところに寄ってきて
「ミチル！！私、この部活に入る！！」
と言い出した。
「え？ちょっと待ってよ、何で急に決めちゃったのぉ？」
「だって、都築先輩だっけ？かっこいいじゃん！それに女の先輩達もすごい優しいの
　ミチルもこの部活に入ろうよ！！！いいじゃん、どうせ一年の間だけでしょう？」
確かに、嫌になれば１年で辞めることも可能だけど。あまり気乗りしないなぁ・・・・。
「・・・でもなぁ・・・」
「迷ってるなら、入ったほうがいいって。部長さん！！！この子も入りますっ！！」
「えーーーーメグっ！！やめてってば！！！」
「おぉ・・・いいねぇ。麗しの友情。ＯＫよ、お二人、入部決定ぃぃぃ！！！！」
おい、マジですか？本気なんですか？二人とも・・・・・。

もう二人のパワーのすごさにどうでもよくなってきましたよ。
「もう、いいよ。諦めた。」
「そうそう、人間諦めも肝心！！！ね、部長さん」
「そうなんだよ！！もっとも、ボクは諦めなんて言葉しらないけどね」

この部活に入るのを早まったかな？
ま、いいか。隣人がなんだ！オカマ口調の部長がなんだ！！ニヒルな女の先輩がなんだ！
楽しければすべてよし！！！！

「さぁっ！！はじめようか？新入生諸君！！」

その部長の掛け声とともに、部員達は何やら準備を始める。一体何が始まるのだろう？

「ねぇ・・メグ。何が始まるんだろうね？」
「さぁ？新入生歓迎パーティとか？かなぁ？？」
「でも、そんな感じはしないんだけど・・・・」

部員達は手馴れた感じで、準備をしている。長机の上に各楽器が並べられる。
楽器の名前当て？とか。んなわけないか・・・・・。
そんなことを考えている間に、準備が終ったらしく部長さんが手を叩く。

パンパン！！

「さぁ・・・一体何が始まるのか気にならないぃ？？新入生の子達が目当ての楽器があって
入ってきたかもしれないけれど、そうはいかないのがこの部活。今、ここに並べられた楽器を

すべて吹いてもらって、我々がその子にあった楽器のパートに行ってもらうという事をするの。
自分に一番ふさわしい楽器のところに行ってもらいたいじゃなーぁい？？」
えぇと・・・部長さんって男の人ですよね？さっきから気にはなっていたんだけど・・・オカマ口調？
「じゃぁーさっそくやってもらおうかしらん？？」
ほら・・・。

私はどこのパートになるのかなぁ？そうだなぁ、なるべくなら木管の方がいいかも。
でもＣＩ（クラリネット）はちょっと嫌かも・・・・だって、都築さんとこの長男・・・じゃないや都築先輩がいるからちょっと・・・ねぇ。ＦＩ（フルート）がいいかも。なんか私にピッタリ？？
メグは・・・・きっとＣＩに入りたいんだろうなぁ。だって都築先輩が好きなわけだから・・・・。

「あ、あのさぁ・・・メグ？どこのパートに入りたい？」
「ん？？もちろん！！都築先輩のいるＣＩに決まってるじゃん。でも自分に一番あったパートに配属されるわけだから、そうも言ってらんないよねぇ・・・・」
「そぉだねぇ・・・・あ、あの子。さっきＴｐやりたいって言ってたのにＴｂに配属みたい。」
「難しいねぇ・・・でもそれはそれでよかったと思えるんじゃない？」

どんどん決まっていくけれど、ほとんどの子が自分の希望のパートとは違うパートに配属されていた。

「次！！メグちゃんっ！！」
「あ、はぁーーーーい。お願いします」
金管から吹いて、木管、そしてパーカッションという順番でやっていく。
すべて吹き終わった後で、先輩達が意見をまとめて発表する。
「メグちゃんは・・・・ＣＩに決定ね。あっちの方に座って待ってねん」
「あ、はいっ！！ありがとぉぉございますっ！！」
メグは希望どおり、ＣＩに配属された。ちょっとうらやましいかも・・・・。
なるべくならメグと同じパートに行きたかったが、ＣＩとなると・・・ちょっと嫌かもしれない。

でもそんなことは言ってられない！！さぁっ！次は私の番だ！！

「えぇっと次はミチルくんだね。」
「は、はいっ！！お願いしますっ！！！」
さぁーまずは金管からだ・・・・えぇとコレに口をあてて・・・息を吹き込めばいいのよね？よぉし。
スカーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！

あ・・・・。

教室全体で苦笑い・・・・。
「・・・・ん？緊張してるのかな？？じゃー木管吹いてみよう！！」
「あ、はぁあ・・・・」
よぉし！今度こそ。えぇとココをくわえて、息を吹き込む・・・・せぇのっ！！
ピーヒョーーーーーーーン・・・・・・。

あ？・・・・・・おかしいなぁ？？？

教室全体が騒然としていた。
「じゃっじゃーーーーパーカッションやってみて」
「・・・・はぁ・・・」
叩くだけ！とりあえずは叩くだけじゃない！！！！さぁ！！やるのよ、ミチル。

スカっ・・・・・・・・・カンカンカンカカッカカッカカン・・・・・・・。

スティックが吹っ飛ぶ。
教室全体がどうしようもない雰囲気につつまれる・・・。
「え・・・もしかしてあなた、うっそ・・・・信じられない」
と、部員の女の先輩がボソっっと言った。
部長さんも困っている。あぁぁぁ・・・どぉしよう。きっと入部を断られるんだ・・・はぁ。

しばらく、先輩達の話が続いた。
そうよね・・・楽器が何も出来なかったら、この部活にいる意味がないもんね。
「さてさてミチルくん。」
「はぁ・・・はい」
「君はどうやら楽器というものを使うのに向いていないらしいねぇ」
「えぇ・・・どうやらそうみたいです」
「で・もっ！！君をココで手放してしまうのはなんだかおしいので、今日から君はこの部活の
マネージャーをやってもらうことにしたよ。実際、現マネージャーも楽器が吹けなかったんだからね」
「マネージャー・・・・ですか・・・。はぁ・・・がんばってみます。」
なんか、雑用にまわされた？って感じ？しょうがないからとしか考えられないよ。
「ミチル・・・大丈夫？でも、とりあえずは配属場所が決まってよかったね」
「う、うん・・・・でもさぁマネージャーって一体何やるんだろうね？？」
「確かに・・・・あ、あの人でしょ？今のマネージャーって」
こっちに向かって歩いてきてた。黒髪で肩よりちょっと長めの髪の毛。
キレイな人だった。

「えぇっと・・・どっちが日向未散さん？？」
かすかに笑みをこぼす感じで、話かけてきた。
「え、あ、はっはい！！私が日向です。よろしくお願いします」
「ははは。そんなに堅くなんないでいいのよ？えぇっとミチルちゃんでいいかな？」
「あ、はい。えぇっと・・・先輩のお名前は？」
「そうだった。私の名前は草野雫よ。下の名前でいいからね」
よかった・・・やさしそうな先輩で。
「ミチル、私もパートでなんか顔合わせやるみたいだから、終ったら一緒に帰ろう」
「うん。がんばってね」
「おうよっ！！」

マネージャーの仕事を聞いているときに、雫先輩が急に笑い出した。
「え？え？どうしたんですか？？」
「いやぁね・・・さっきのミチルちゃんの楽器選択のときのことを思い出しちゃって・・・」
「あ・・・恥ずかしいです」
「ううん・・私も去年はそうだったからさ」
「え？」

どうやら、雫先輩もまったく楽器が吹けなかったらしい・・・。よかった私だけじゃなくて。
「でも、あそこまで豪快ではなかったけれどね。部員たちが笑いをこらえるの必死だったから」
「はぁ・・・やっぱりそうですよねぇ・・・・はぁ・・・」
だから、私が終った後、みなさん下向いて口を抑えてたのね・・・納得です。
にしてもやっぱり、この部活自体に入ったのが間違いだったのかなぁ？？
なんだかやっていける自信がないなぁ・・・はぁ・・・。ため息をついて、背中を丸めていると頭をコツンとやられた。誰よ？と振り返るとそこに・・・・あの、都築先輩が立っていた。
「なぁにしょぼくれてやがんだ？ま、さっきのはおもしろかったけどね。そんな事で落ち込むなよ？
マネ（マネージャーの略）だって楽じゃないんだから、な！雫」
「ちょっと、今から教えるのに大変だって言ったらやりたくなくなっちゃうじゃない？」
「ははっ・・・ごめんごめん。」
大変・・・なんですか？忙しいのですか？？そりゃぁ・・・・やりがいがありそうですね。
「ほらぁ！！！顔色が曇ったじゃない？？どうしてくれんのよ？庵っ！！」
「え？あ、おい。日向、大丈夫だって。雫は女の子にはやさしいと思うからさ。でも怒るとマジ怖いよ？」
「あ、そうなんですか？？怒ると・・・・」

「ちょっとぉ？？いーおーり？？」
あ、本当に怖い。怒らせないようにしなくちゃ・・・・やっぱり大変じゃん。
「ごめんってば」
そういえば、この二人下の名前で呼び合ってるんだなぁ・・・なんか仲いいし・・・。
雰囲気が、どっちかっていうと友達じゃなくて・・・そうだなぁ・・・・恋人同士？みたいなかんじ。

「あ、あのぉ・・・・お二人って付き合ってるんですか？」
思ったことを率直に口に出すのが私の悪い癖なんです。そして言い終わった後に、後悔をする。
二人はお互いの顔を見合わせたまま、何も言わない・・・・。
「すみません・・・・余計なことを詮索しちゃって・・・・」

二人とも下に顔を向けたまま何も言わなかった。

都築先輩が口を手で抑える。

そして、ゆっくりと口をあける・・・・

「あぁ・・・・実はな。オレとコイツは付き合ってるぜ？」

それを聞いた瞬間、なぜだか胸が痛くなったのは気の所為って事にしておこう。

「あぁ・・・・実はな。オレとコイツは付き合ってるぜ？」

都築先輩の口からでた言葉。あっさりとその口から放たれた言葉。
自分で聞いておきながら、聞かなきゃよかったかもと思っている自分がそこに確かにいた。

その言葉を聞いて呆然と立っている私の顔を都築先輩が覗き込んだ。

「・・・・大丈夫か？意外だった？？それともぉ～・・・・？？」
「え・・・っ？？あ、だ、大丈夫ですよ」

変な返事を返してしまった、、、、。
すると都築先輩は雫先輩の方を見て、二人で急に大笑いし始めた。

「ぶっ・・・・はははははっ！！！」
「ははっ・・・・あはははは」

私は何が起こったのかがまったくわからず、ただやっぱりそこに立っているだけだった。

「え？え？え？？？二人共！何がおこったんですか？？急に。」
「くっくっくっ・・・・・いやぁ日向さんっておもしろいな・・・なっ！雫っ」
「からかいすぎよ？庵。ごめんね、ミチルちゃん。」

それでもやっぱり状況がつかめない。一体何が起こったというのだろう？

「付き合ってないんだよ。あーーー付き合ってた？だな」
「へ？？そぉ・・・なんですか？」
「ん？？？安心した？」

ちょっと意地悪げにそう言い放った都築先輩を呆れ顔で見ていた。
安心・・・・したと言えばそうかもしれない。

「で、でも付き合っていたんですか？？」
「ん？まぁな。といってももう大分前に別れたんだけどさぁ・・・・コイツ、まじで
最悪でさぁ・・・・すんげぇ男っぽいの。」
「庵が軟弱なんでしょ？そんな男こっちから願い下げだってば！！」
「ははっ。オレもだって。恋人同士よりもこういった風に友達の方が俺らには合ってた
　っていうワケなのよ。な、雫。」
「そぉね。くだらないことで笑ったりするのはこの距離が一番いいもの」

と笑顔で昔話に花が咲いた二人。
そこから私は彼らの話を延々１時間聞かされた・・・・・いい加減にしてよとツッコミでも
入れようかと思ったけど、さすがにやめた。

パンパン・・・。
部長さんが手を叩く音が部屋中に響き渡って全員が注目した。

「はぁ～い。じゃぁ今日はここまで。家の方向が同じ人で固まって帰ってね、遅いから」
そんなに時間が経っていないような気はしてたけど、時計を見てみたら8時を回っていた。
あー・・・・お母さんに何も言わずにこんな時間になっちゃった・・・・。
やばいなぁ・・と恐る恐る携帯の着歴を見てみる。
『不在着信　　１２件』
うわっ・・・・・かけすぎだってば。はぁ・・・・とため息をついて携帯の画面を見ていた。

「どしたの？ミチル？？」
「あ、ああぁ・・・メグかぁ・・・びっくりしたぁ」
「ん？何？あぁ・・・お母さんからかぁ・・・大変だねぇ・・・送っていこうか？？車で？」
「へ？」
「私、いつも送ってもらってるからさぁ・・・いいよ？別に。乗っていく？」
「・・・・・んーごめん。いいや、歩いて帰るよ」
「そう。じゃぁ、また明日」
「うん。バイバイ」

いつも送ってもらってるってどういう家柄よ？
あー確か聞いたなぁ・・・・金持ちだったような気がしないでもない・・・いいなぁ（ボソっ）
さぁて一人で帰るか！とカバンを持って部屋を出ようとしたら後ろから大声で呼ばれた。

「日向！！どぉせ隣人なんだから一緒に帰ろうぜ？」
「え・・・・・・・・」
「見るからに嫌そうな顔しないでくれる？」
「・・・別に嫌ではないんですけど・・・」
「すんげぇオレのこと睨んでいるんですけど・・・・ま、いいか」

結局、私は都築先輩と帰る事になった。
帰り道で先輩はすっごく音楽が好きということを知った。
昔から隣の家から、ピアノの音が聞こえてたなぁとちょっと思い出した。

「ん？お母さんになんて言おうか困ってるの？」
「はい・・・どぉしよう」
「オレが説明するよ。その方が安心するっしょ？」
「え・・・・・・・」
「え？なんかまずい？」

えぇ、とっても。だって、私のお母さんは都築先輩のことを『不良』って思ってるし。
そんな先輩と一緒にいましたぁ～なんて言ったらかなりまずいんじゃないの？
と頭のなかで四苦八苦しながらしているうちに家の前についてしまった。
「あれ？玄関の前にいるのお母さんじゃないの？」
え・・・・？？？？？？？？？？？マジですか？あぁぁ・・・私の人生サヨウナラ。

「ミチルっ！！！！！あんたは、何回携帯鳴らしたと思ってるの？？」

「あぁぁ・・ごめんなさいっ！！」
「ごめんですむなら・・・・・って隣にいるのは誰かしら？」
やばっ・・・都築先輩に気づいた。
「あ、あぁえぇっとね、この人はね・・・・」
と、どう説明しようか迷っていたら、隣にいた先輩が前にでてしゃべりだした。
「初めまして。隣の都築です、ミチルさんは今まで部活見学してた為に遅くなったんです。
　怒らないでやって下さい。」
と丁寧に母親に説明をし始めた・・・・。母親も最初はすごくビックリしていたけど
いつの間にやらなごんでいた。もしかして、先輩はおばさんキラーなのかなぁ？？

「そぉだったのねぇ・・・すみませんねぇわざわざ・・・さ、ミチル早く家に入りなさい」
「え・・・あ、あ、はい。先輩、ありがとうございました。おやすみなさい」
「あぁ。別に家は隣だし、気にすることはないよ。おやすみ」

ガチャ。バタン。

玄関ではぁーとため息をついていたら、後ろから母親に背中を思いっきり叩かれた。
バシーーーーンっ！！！！
「いったぁぁ～何すんの？？」
「もう・・・ミチルったらぁ・・隣の都築さんの息子さんをゲットしちゃってぇ、このこのぉ」
母親よ・・・ゲットって・・・このこのぉって・・・どぉよ？
「ち、違うって！！ただ入った部活に都築先輩がいたっていうだけだもんっ」
「にしてもウワサとは全然違うのねぇ・・・すごい好青年じゃない？」
「私も初めて見た時、すごくびっくりしたもん」

なんか、たったの一日過ごしただけなのにすごく長く感じる。
でも頭のどこかでまだ都築先輩と雫先輩のことが気になっていた。
付き合っていたのは過去の話だけど、なんかこう、ひっかかるんだよね。
都築先輩は吹っ切れてる感じはするんだけどなぁ・・・雫先輩の方はまだ、好きな感じが
するんだよね。これはあくまで私個人の勘だけど・・・。
といろいろと考えていたらいつの間にか私は寝ていた・・・・。

夢を見た。

すごい昔の夢。

私は・・・・泣いているの？

「泣かないで？女の子だからって泣いてばかりじゃだめだよ？」
「ひっく・・・ひっく・・・じゃ、どぉ・・すればいいのぉ？ひっく・・・」
「いつも笑ってればいつかは幸せが来るんだよ？でも、泣きたいときは我慢しちゃダメ。
　だから、泣きたくなったらボクを呼んで？ね？」
「う・・・うん・・・」

いつの話だろう？頭の片隅に置き去りの記憶。
その男の子の顔も名前も全然思い出せない。ただ覚えているのは、その子とは
それ以来会わなくなったということ。

なぜだか妙な懐かしさに襲われた。

吹奏楽部のマネージャーになってから、結構たった。
雫先輩もやさしいし、部長さんもおもしろいし、なんだかんだいって都築先輩もやさしい。
夏には合宿もあるらしくて、実は結構楽しみにしている。
でも今は、そんなことは言ってられない状況。だって後２週間後には期末テストが待ち構えているからだ。

「おーはーよーーーぉぉ！ミチルっ！！」
元気よく私にぶつかって来たのは、友達のメグだった。痛いってば・・・・。
「・・・・あ、あぁオハヨ。相変わらず元気だね。ん？何を手に持ってるの？」
メグは新聞のようなものを片手ににぎっていた。とても朝刊を読むタイプとは見えない・・・・。
「ん？？コレ？ミチル知らないの？毎年、新聞部が学園全体にアンケートとってるんだよ？この時期に」
「エ？何の？」
「この学園で一番かっこいいもしくはかわいいと思う人ランキングだよ。」

あほらし・・・・。

それで、さっきからなんかみんな手にした紙を見てたのか。これで納得。
「見てよ！！都築先輩１位なんだよぉ？すごくない？？」

え？え？えーーーーーーーぇぇぇえっ！！！
あの見た目が無愛想な都築先輩が？一位？？確かに、顔だけ見たらかっこいいけどさぁ・・・・。
ちょと納得いかないかも。
「なんで？都築先輩が一位なのよ？」
「えーっと、選んだ人のコメントはねぇ、『見た目がかっこいい』とか『頭がいいから』とかかな？」
「へぇ・・・・・・なんか話したこともない人の意見だね。」
なんか聞いているだけで腹立つ、人を見かけで判断するなんて・・・・。
それって結局は中身を知らないし見てないって事じゃんね。はーーーー信じられない。
「他には『無口でいい』とか『渋い』とかぁ・・・・なんか中身とかけ離れてるね・・・ってミチル？」

メグの言葉が耳に入らず、ひたすらそのコメントに対してイライラしてた。
「・・・・・？大丈夫？ミチル・・・」
「ん・・・・・？？あ、あぁ大丈夫よ・・・って何が？」
にんまりと笑顔でメグは私に耳打ちをした。
「だーかーらー・・・・都築先輩がとられちゃうってことじゃない？わかってるの？」

思考停止。

思考開始。

「な、ななな・・・何を急に言い出すのかなぁ？メグは・・・私は、別に・・・」
急に、メグにそんなことを言われてびっくりしたが私にはそんな気はサラサラない。
ふ～んとか言いながら疑いの目を向けてくるメグの話をなんとかはぐらかそうと、話題をふった。
「あ、他はどういう人がランキングされてるの？あ、可愛い人の方とかさ・・・・・」
「他？あーこんな感じだよ？」

＜かっこいい人部門＞
１位　→　都築　庵　（吹奏楽部　２年）
２位　→　河口　幸輔　（野球部　２年）
３位　→　江本　恭平　（帰宅部　３年）
４位　→　桜崎　龍之介　（生徒会長　２年）
５位　→　佐藤　圭太　（陸上部　１年）

＜可愛い人部門＞
１位　→　藤井　絵里　（新体操部　２年）
２位　→　草野　雫　（吹奏楽部　２年）
３位　→　神野　美奈子　（手芸部　１年）
４位　→　朝倉　淳子　（帰宅部　３年）
５位　→　栗本　玲香　（帰宅部　２年）

「あれ？雫先輩も入ってるんだ。すごいなぁ・・・・」
ふと、思ったが、もしこの都築先輩と雫先輩が別れずにまだ付き合っていたとしたらすごいカップル？
だったのかなぁ？と思ってしまった。このランキングをみても、顔がわかる人は二人しかいないわけで・・・。
「メグ・・・あのさ、２位の河口先輩？ってどんな人？」
「あーあんまり大きな声では言えないんだけどね、もともと吹奏楽部と野球部の仲が悪い事もあって
都築先輩と河口先輩の仲は最悪らしいよ。」
え？初耳。野球部とうちの部活が仲悪いだなんて・・・・そういえば、野球部の試合の時とか応援にいかない
もんなぁ・・・・そういう理由があったんだ。でも２位なんだから、そこそこかっこいいのかな？
こんどこっそり野球部でも覗きにいっちゃおうかなぁ～？？と心で勝手に思っていた。
「じゃー３位の人は？この人だけ帰宅部じゃん」
「んーこの人は、私も会ったことあるんだけど。すっごい気品がある人だよ？」
メグが会ったことあって、しかも気品があるってことは・・・・・・
「この江本先輩はご両親が大企業の社長さんなんだよ。いろんなパーティーであったことあるもん」
あ、やっぱり・・・・。なんかこの学園、金持ちがさりげなーく多いかも。メグもそうだし・・・・。
「じゃー可愛い人部門の１位の人は？どんな人なの？」
新体操部と聞くと、なんだか可愛い感じがしてしょうがない。きっとそうなんだろうなぁ。
「見た目はすっごく純な感じなんだよ。でも、ウラではかなりすごい事やってるって聞いた」
凄いことって・・・・・何よ？そっちの方が気になるわ。
と、いろいろとランキングに関してメグに聞きながら、学校に向かっていた。
すると後ろの方で、なにやらもめている声が聞こえた。二人で振り返ってみるとそこには都築先輩ともう一人。
見たことのない人が、歩いていた。

「あ、あの人だよ、ミチル。２位の河口先輩！！」
それを聞いて納得した。顔はジャニーズ系？のかわいらしい顔で、とっても野球部とは思えない。
スタイルも筋肉質というよりは無駄な脂肪がないって感じでひきしまっていた。
確か、メグの情報によると二人は仲が悪いんじゃなかったっけ？？でもすごく仲がいいように話している。
近づいてきたので話が聞こえてきた。

「また、都築１位だってな。おめでとさん」
「そういう河口はまた２位だってな。残念だったな」
「・・・・・てめっ、いちいち言い回しが気にくわないんだよ！！」
「知るかよ、俺は前からこういうしゃべりかたなの！！おめぇに言われる筋合いはこれっぽっちもないね」

レベル低っ・・・・・。
なんなんだこの低レベルの会話はと思ってしまうほど、バカらしい内容だった。
小学生でもこんな話はしないだろう？っていう内容だ。しかもお互い目を合わせようともしないでいる。
じっとその様子を見ていると、都築先輩と目が合ってしまった。マズイと思い、咄嗟に目をそらした。

「おぉ・・日向じゃんっ！！おはよっ」
そう言いながら、私の方に寄ってきた。あまり、この状況で近くに来て欲しくなかったかも。と思いながらも
笑顔で言葉を返す。
「お、おはようございます。今日もすがすがしいですね」
心に無いことを言う自分が悲しい・・・。そのやり取りを横目でチラチラ見ている人がいた。
そう、河口先輩だ。なにやらいいたげな表情だった。見られているという感じがしたので、ついつい河口先輩の
方を向いてしまい、彼と目があった。すると彼は口を開いてこう言った。

「あんたさ、その男とあんまりかかわんねぇ方がいいぜ。ロクな事ねぇーから」
そういうとさっさと去っていってしまった。ロクな事？すでに彼とはこの学園に入る前から知っているわけで
今更どうしようもない。
「あーあれだな。アイツのいう事は気にするなよ？アイツ、俺に対してライバル視してるからさ」
と笑顔で私の頭をポンポン叩きながら言い、そして学校へと足を早めていった。

私にはそれが、「アイツのいう事は当たってる」といいたげな表情に見えてしょうがなかった。

このことが気になって２週間後の期末テストが最悪だったことは言うまでもない。

最悪だ。最悪だ・・・・家に入れてもらえるだろうか？？
『勘当だ！！』とかってお父さんに言われないだろうか？？それだけが心配で・・・・。

「ミーチール！！テストどうだったぁ？？」
うわ・・・今一番触れて欲しくない話題なのに・・・・・・はぁぁぁ・・・ついてない。
「・・・最悪だよぉ・・・これじゃぁ家に帰れない・・・」
「めずらしいぃ～中間はクラス３位だったじゃん。どしたの？」
そう、中間の成績がよかった分、今回の悪さが引き立ってしまうのだ・・・はぁ・・。
どれぐらい順位が落ちたかなんて口にも出したくないよ。
「ま、気を落とさないでさぁ～！！さ！部活に行こう！！」

そんな気分にもなれないよ・・・はぁ・・・さっきからため息ばかりだなぁ。

テストも終ってほっとしているはずなのに、この部活はちょっとピリピリしている感じがする。
なんでだろう？とカレンダーを見たら、コンクールまで日にちがないことに気づく・・・。

すっかり忘れてた。なんていったって私はマネージャーだから実際には関係がない。
それによってコンクールが近いっていう気持ちが高まらないんだよなぁ・・・・。

「ミチルちゃん。そろそろ合奏が始まるみたいだから、こっちおいで」
雫先輩が私の肩を叩きながら言った。マネージャーである私達は合奏になると邪魔者扱いなのだ。

各パートごとにコンダクターがチューニングと呼ばれる音程を合わせる作業に入った。
木管が終わり金管に差し掛かった時、ふと自分の耳に違和感のある音が飛び込んできた。
なんだろ？音の波が揺れている感じ・・・・・気持ち悪い・・・・。
「雫先輩。なんか音が気持ち悪いんですけど・・・あの右から二番目のＴｐの人・・・・」
「えっ？？湊先輩！！Ｔｐ、もう一回チューニングし直してみてください。なんか合ってないっぽいんで・・・」
「え？あ、あぁ・・わかったよ。じゃーＴｐもっかい音ちょうだい」

数分後にはその気持ち悪いのはなくなっていて、戻っていた。
あれは一体なんなんだろう？？不協和音？ではないしなぁ・・・いろいろと考えてると頭がまた痛くなりそうだ。

「おい。日向、お前・・・この音なにかわかるか？」
急に都築先輩が自分のクラリネットを使って、音を出した。一体何をしたいのかがわからなかったが
言われたとおり、自分の耳に聞こえてきた音を口に出した。
「え・・・ファ？ですか」
「・・・じゃーこれは？」
正解とかそういうのもなく、次は壁を手で叩いた。その音を答えろというのだ。無理だなと思ったけれど
私の耳にはすんなりその音が聞こえてきたのだ。
「あ・・・ドです」
それを言った瞬間、周りがザワザワした。部長さんと都築先輩がなにやら話している・・・・。
話が終ったのか都築先輩が私に近づいて来て、こう言った。
「お前、絶対音感あるって誰かに言われたことないか？」

絶対音感？？何それ？？

「あ、あのぉ・・・それってなんですか？」

初めて聞く単語に驚いて、思わず聞き返してしまった。都築先輩はえ？って言いながらも説明してくれた。
「絶対音感っていうのは音楽の音以外の高さを他のものと比較しないで識別ができるっていうものだよ」
「ほうほう・・・・・ってそれはスゴイことなんですか？」
「うーん・・・・スゴイことだよ。でも・・・・」
「でも？」
「なんで楽器ふけねぇーんだ？？それがさっきからつっかかるんだよねぇ」

そうだった。月日が流れてそんなことをすっかり忘れていた。
楽器が一つも出来ないから、マネージャーになったんだったよ・・・・思い出した。

「そ、そうですねぇ・・・・なんででしょう？？あ、でも音楽の先生に歌上手って言われました」
「それは・・・・あんまり関係ないんじゃない？」

あ、さいでっか・・・・・。

そんな話題で一時合奏は中断されたけれど、すぐに再開されてコンクールの課題曲と自由曲の練習に
入った。形になっているものの、まだまだと部長さんは言っていた。
私には楽器を吹くということがどれだけ大変だとかそういうった気持ちはわからないけれど、この場所にいるだけで
みんなに気迫が伝わってきて、がんばらなきゃっていう気持ちになる。

がんばろうって・・・今さっき思ったのだけれど、いざ家のドアを目にすると入りづらい・・・。
なんて言われるかなぁ？？部活やめなさいっ！！って言われそう。
でも、それだけは絶対に嫌だな。部活は３年間ちゃんと続けるんだと心にきめちゃってるもん。

「ぎゃーーーーーーー！！なんなの未散！この成績は！！」
「ご、ご、ごめんなさいぃ・・・・・・今度は、今度は挽回するから！！ねっ？？」
「・・・・絶対よ？約束したからね。いい成績をとれとは言わないけれど、下がりすぎよ？これは」
「わかってる・・・・」

なんでこんなに成績が下がってしまったのか、その理由もちゃんとわかってる。
２週間前に起きた出来事が頭の中でずっとひっかかっていて・・・・それで・・・・勉強に手がつかなかったんだ。
自分でも驚くぐらい、あの言葉と表情に踊らされてるなぁって思うよ。

コンコン・・・
部屋の扉を叩く音がした。「はぁーい」と返事をしたら、妹の有咲（ありさ）が入ってきた。
「おねぇちゃん、今回のテストひどかったんだってぇ？」
コイツは・・・・中一になったっていうのに、もう少しおねえさんをいたわれっていうんだ！！！
「うるさいなぁ・・・おねぇちゃんだっていろいろと悩む事あるんだから！！」
「ふぅーん・・・・・・それって恋？男？そうなんでしょ？」

す、するどい・・・・・。

「恋・・・ではないけど、ほら、隣に住んでる都築さんの兄の方でちょっと・・・・・ね」
「あぁ。部活一緒なんだってね。お母さんに聞いた。しかも結構いい男らしいじゃん」
いい男って・・・そりゃ学内でかっこいい人に選ばれるぐらいだからそこそこであることには間違いではないけど。
「隣っていえば、私はその弟と同じクラスなんだよ」

弟？これは初耳だ。

「へぇ～どんな子なの？」
「名前は陸（りく）っていって、頭いいし運動もできるし性格もいいしって言う事なしなんだけどねぇ・・・・・」
「なにか他にあるの？」

すごくいいにくそうな表情で、私と妹以外誰もいない部屋なのにキョロキョロ辺りを見渡して私に耳打ちをした。

「すっごい音痴なの」

へ？

それと同じぐらいの時間、隣の都築邸では・・・・

「な一兄貴、聞いてくれよ」
弟の陸が兄である庵の部屋に入りながら、そう言った。
「おい・・・ノックぐらいしろってば！！んで、なんなの？」
宿題でもやっていたらしく、机に向かっていた兄。弟の話に耳をかそうと床に座りなおした。
「同じクラスのさぁ～って隣の日向のことなんだけどー」
「ん？日向？」
「あ、あぁ妹の方ね。オレとタメなんだよ。まじこえーの！！！」

中学１年にもなって、未だに女の子が怖いっていっている自分の弟が情けなかった・・・・。

「あのなぁ。お前、自分の歳考えろよ。そんなこと言ってる年齢じゃねぇーだろ？」
「兄貴と一緒にするなよ。自分は中学の時・・・」
「陸君？？それ以上言ったら・・・・・・・・・」
あまり、自分の過去に対して他人から聞きたくない。あれはほんの一時の気の迷いだったんだと信じたい。
「あーごめん。でもよーまじこえーんだって！！きっとアイツのネェちゃんも怖いんだろうなぁ～」

「いや、それはないだろ」

咄嗟にその言葉が出た。知り合ってまだそんなに時間は経っていないけれど、それだけは言えるような気がした。
かばうわけじゃないけど・・・・。
そういえば、日向の事あまりっていうか全然しらねぇや…・・・。
なのにこんな事言っちゃっているオレって・・・どうしたんだろうな？わけわかんねぇ・・・・・。

はぁーーーーモヤモヤする。

部活自体もコンクールやらでなにやら忙しい。
そんな中、私のもっぱらの仕事は絶対音感を身に付けているが為のもの・・・・。

そうチューニングメーカーとして、働いている。
雫先輩には悪いけれど、ほとんどマネの仕事をやらせてしまっているような気がしないでもない。
先輩にすみませんと謝ると、「そんなこと気にしなくていい」といわれてしまう。
先輩に気をつかわせてどうすんだ？自分・・・・・。

「さぁっ！！もうすぐ、アンサンブル＆ソロコンテストだねぇ・・・・」
と部長先輩が言った。アンサンブルででる人もいれば、ソロででる人もいる・・・・。
都築先輩の場合は毎年、金賞をとる腕前だとか。そういえば、体験入部の時聞いた演奏もすごい
キレイだった・・・・。ぼーーーっとそのときの様子を思い出していたら、後ろからいつもの様にこづかれた。

「いたっ・・・・・また、都築先輩ですか？いい加減に私の頭こづくのやめてくれません？」
こづかれた部分を手でさすりながら、そう言うと鼻で笑われた。
「お前の頭がオレの指のちょうどいい位置にあるのが悪いんだよ」
んなっ！！なんだそれっ！！
「ぼーっとしてねぇで、部活終ったんだから帰るぞ」
当たり前のごとくサラリと言ってのけた言葉。一緒に帰るのか？と思い、見るからに嫌そうな顔をしていた。
「そんなにオレと帰るのが嫌なのか？なら、いいけど・・・」
「あ、い、いやぁ・・・そうじゃないですよ！！！さっ、さっ帰りましょう！！！」

目つきが怖かった。
寂しげな表情というよりも、何か・・・・背負ってる。そんな感じがその言葉には隠されているような気がした。

「そういえば、オレの弟と日向の妹さ、同じクラスなんだって？」
「え、あぁ。そうらしいですね。弟さん、オンチって本当ですか？」
目を丸くして、その場で立ち止まり口に手を当てて必死に笑いをこらえていた。
「んっ・・ははは・・・何？お前の妹そんなことはなしたの？陸も怒るだろうなぁ・・・ふっ・・はは」
よほど溝にきたらしく、そこでしばらく笑っていた。そんな都築先輩をみて、私も笑えてきた。
「いつまで、笑ってんですか・・・先輩の姿が私はおかしくて・・・・・・・・」
「なんだよ、それ。お前の妹、怖いんだってな？陸が言ってた」

怖い？恐ろしいの間違いじゃなくて？
「え、あぁ妹は怖いというより、おかしい感じもあるんですけどね」
「ふっ・・・・姉妹そろっておかしな感じなんだな・・・」
なっ！！おかしいって・・・そんな風に思われてたんですか？？
にしてもこんなに笑う先輩ははじめてみたかも。来週にはソロのコンテストがあるというのにこれっぽちも
プレッシャーを感じていない。よほど自分自身に自信があるのかな？とも思えてしまう。

家の近くの公園を通りかかった時、公園の中から声がした。どこかで聞き覚えのある声。
「ん？陸・・・・・」
そういうと、スタスタと公園内に入っていってしまった。陸って、先輩の弟の名前だよなぁ？？
「ちょ、ちょっと先輩・・・・」
そう言いながら追いかけると、シッと人差し指を口の前に出した。そしてそのまま公園内を指さした。
そこには先輩の弟と私の・・・・・有咲？？？？？な、なんでぇぇ？？？
そう、二人が仲良さそうにブランコに乗りながら話していたのだった。
ちなみに私達二人は茂みになぜか隠れて見ていた。すると急に陸君？がブランコから降りて有咲の方に
よっていった。二本の鎖に手をかけて、しゃがみこんだ・・・・・・・って！！！！！！

キ、キスぅぅぅ？？？？？？してない？？？ねぇ！！ねぇ！！！

一人その光景に動揺していた、ふと都築先輩が気になって覗いてみたら、口がぽかーんって開いていた。
「な・・・あいつらそういう関係なのかな？」
そう聞いてきたが、そんな（失礼）質問の答えを考える余裕は私の頭にはなかった。
そして先輩は何を思ったのか、茂みから飛び出していた。

「陸。お前何やってんだ？」

「うっわぁぁぁ！！な、なんで兄貴ここにいるんだよ！！」
「別に、お前には関係ない。第一何時だと思ってんだ？」
やさしい表情ではなくて、厳格な兄そのもの。部活での先輩からは考えられない。
「そ、そこまで言わなくてもいいのでは？？」

と私がフォローに入った。有咲は私までも出てきたことに驚いて、声もでないようだった。
「・・・・・見てたの？」
と、小さく私に言った。ただ首を縦に振っただけで、声にはださなかった。
まさか、二人が二ヶ月前ぐらいから付き合ってるなんて・・・・なんでこの前話さなかったのかと疑問だった。
この公園からお互いの家は近く、歩いて５分のところだ。
無言で歩きながら家の前についた。
「じゃぁ・・・・」
そう都築先輩と弟くんは家に入っていった。

私がお風呂から上がって部屋に入ると、有咲が部屋にいた。
「な、どうしたの？」
「さっきの事・・・・おねぇちゃんは何も言わないんだ、と思ってさ」
「何も言わないんじゃなくて、何も言えないだけよ。あんたがうらやましいわ」
「・・・・・まだ慎二くんのこと・・・・ひきずってるの？」

慎二・・・・・か・・・・。

「んなことないよ！！もう昔のことでしょ？」
そう言いながら手にしてた、お茶を口に含んだ。
「じゃぁ・・・・陸のお兄さん？？」
ぶっ・・・・・・・あ、あぶねぇ・・・口から豪快にお茶を噴射するところだった・・・・・。
「なっ！！人が飲み物飲んでる時にジョーク言うのはやめてよね！！はぁ・・・」
「ジョークじゃないってば。あの人ならなんか、おねぇちゃんの過去消してくれそうな気がする」
そう笑顔で言われてもねぇ・・・・。彼自身もそうとうな過去を背負っていると思う。

それは、私も同じ。

忘れていた過去の出来事。

消えることのない心の傷が痛み出した。

そう、来週に迫っていたアンサンブル＆ソロコンテストの会場で、彼に会うまでは・・・・。

前に立ちはだかるのは、昔の記憶。

３日前に妹からこんな事を言われた。

「お姉ちゃん・・・もう彼氏つくらないの？」

と・・・。

つくらないんじゃないの。つくれないんだよ？と話したら、わかってくれたみたいだった。
でもその顔はあまりにも切なくて・・・・・私が彼女を励ました。

なんだかんだいってアンサンブル＆ソロコンサート当日。
朝早く学校に集合して、全員で会場に向かった。中には出ない人もいるけれど、他人の演奏を聞くのも
勉強だということで、強制的に全員参加なのだった。

「おぉーい、リードケースないんだけど？知らない？」
「あーーっ！！リード割れたよぉ・・・これ一番吹きやすかったのにぃ・・・」
「のど渇いたぁ・・・」
「譜面！！どこ置いたっけ？？」
「あー次だよぉ～緊張するぅぅ～」

会場内には他の学校の生徒であふれ返っていた。
控え室というモノは存在しておらず、自分の番の時間、１０分前には舞台袖にいなければならない。
私達の学校も結構慌しくしていた。マネということもあって、私なんて走らされっぱなしだった。

「はぁ、はぁ・・・・もーーーー都築先輩、人使いあらいってば！！！」
文句を大声まではいかなくとも、口に出して会場内を走っていた。
その時だった。

「ミチル！！！！」

聞き覚えのある声。聞いた瞬間、足が止まった。振り返るのが怖かった・・・・・。
私に近づいてきたのは他の学校の生徒。その制服から有名進学校の「荒川野高校」だという事がわかる。
そして、振り返り私は顔を確認した。やっぱり・・・・忘れることのできなかった声・・・・顔・・・・・。

私が中学の時、付き合っていた人がいた。
名前を『大東慎ニ』という。彼はとても頭がよくて、学内の成績は常にトップだった。
二人ともお似合いのカップルとして、結構学校では有名だった。しかし、受験シーズンになる前に
彼から突然、別れを切り出された。理由は簡単なことだった。

「お前と付き合ってるってことで成績を落としたくないし、受験に専念したいんだ。だから別れてくれ」

そういわれた。彼が進学校を目指していたことも知っていたし、なによりもプライドの高い人だったから
しかたないと思って、別れた。私自身も彼にそろそろ冷めはじめていたからちょうどいいと思った。

悪夢はそこから始まった。

付き合っている時はなぜかメールも電話もしてこなかったのに、別れた瞬間から頻繁になっていた。
しかも携帯にでないと家の電話にかけてくるといったぐらいに・・・・。
それが毎日のように続いて、家族にも迷惑がかかるからやめてほしいと直接彼に言った。
でも聞き入れてくれないどころか彼は「お前はおれが好きじゃないのか？」とまで言ってきた・・・・。
信じられなかった。別れたはずなのに、自分から別れようといったはずなのに・・・・・。
電話などは一切なくなったけれど、今度は家に押しかけてくるようになった。
誰も出ないと、家のドアを蹴ったりして近所にも多大な迷惑をかけたし、警察もきたりしていた。

その頃の私は、彼の豹変ぶりに驚くばかりで私以外の人にも迷惑をかけてるということで
精神的にまいっていた。毎日のように病院の精神科にいってはカウンセラーなどうけたりしていた。

その彼が今、目の前にいる。笑顔で立っている・・・・・。
避けていたはずなのに・・・・・。

彼が何かしゃべっているのは口が動いているからわかる。けれど、何を話しているのかはまったく耳に入らない。
下を向いて何もしゃべろうとしない私に彼は、私の肩に手を置いた。
「大丈夫か？顔色悪いぞ？」
そう言ったのは聞こえたが、もう立っているのが限界だった。
私は彼との過去の記憶を思い出して、吐き気がする思いだった。その場に座り込んだ。

遠くから人が走ってくる音がした。
「おいっ！！大丈夫か？？なかなか帰ってこないから、何かあったかと思って・・・・」
その声は都築先輩だった。立てる気力もない私をうまく支えて立たせ、歩かせた。

私の耳には他の人の言葉は入ってこない。そのまま、目を閉じてしまっていた。

「お前、荒川野の生徒か？コイツと知り合いなのか？」
「あ、あぁ・・・中学の時の同級生で・・・」
「ふーん・・・・・てめぇのツラどっかで見たことあるんだけどなぁ？？会ったことないっけ？？」
「な、ないと思いますけど・・・・」

そういうと、都築は大東の胸倉をつかんで思いっきり睨んでこう言った。

「いい加減、コイツから足を洗え！てめぇのせいでこいつの家族はバラバラになったんだぞ！！！」
「なっ・・・・」
「何で知ってるのか？とでもいいたげな表情だな・・・・教えてやんねーよ！！」
そういい終わるとつかんでいた手を思いっきり離して、ミチルを担ぎながら歩き出した。

そのままの足で医務室へと向かった都築。
部屋には誰もおらず、ベットにミチルを寝かした。
寝息を立てながらも、目からは涙がポロポロと流れ落ちていた・・・・・。
その涙を指でぬぐいながら彼は

「お前だけじゃない・・・・過去に戻りたくないのは・・・・オレも同じだ・・・・・」

そう言って頭を抱え込んだ・・・・。
彼もまた、暗い過去を背負っていた・・・・・ミチルよりもはるかに重い過去を・・・・・。

「お前だけじゃない・・・・過去に戻りたくないのは・・・・オレも同じだ・・・・・」
そう都築先輩が言ったのは聞こえていた。
でも、そこで目を開けるのはどうかと思って・・・・寝たふりを続けていたんだ・・・・。

「オレは・・・友達を殺したも同然だから」

小学生の頃から何か楽器をやりたいと思っていて、中学にはいってからクラリネットに出会った。
最初は部活ではなくて、あくまで習い事として。
似合わないとか言われるかもしれないけれど、実際オレは何かの輪に入るってことはキライじゃない。
むしろ、集団の方が居心地がよかったりするもんだ。

でもそれは家の顔。

学校でのオレの評判は最悪で、母親が学校に呼び出しをくらうのも多々あった。
そのたびに母親は「わからないようにやりなさい」と何度も言った。本当の母親が言うセリフじゃねぇーけどね。
そんなオレは中２の時、すでに日向が言っていたように『番長』と呼ばれるようになっていた。
学校内だけではなく学校外からも慕うやつらが出てきたりして、いろいろと大変だった。
中３になると町の暴走族を従えて、無茶なことをして遊んだりもした。
まぁ、それなりに警察のお世話にもなった。今、思えば若かったなぁってね。

でも、そんあオレも足を洗おうって気になったから驚きだ。
その出来事は中３の時に仲良くなった友達だった。
クラスでは目立つタイプではなかったけれど、友達は多くて何よりもよく笑うヤツだったんだよ。
オレにはその頃、不良友達しかいなくてオレ自身もかなりやさぐれてて好んで近寄ってくるやつなんていなかった。

でもソイツは違った。

「ねぇー都築ってさぁ、番長って呼ばれてるんだって？？」
「はぁ？なんだお前」
最初の会話はそれだった。ガンを飛ばす俺にもひるまないで話し掛けてくる。コイツには恐怖ってものがないのか？

それから何度もオレに話し掛けてくるコイツにオレはどんどん惹かれていった。
ある日の事だったか、初めてオレがソイツの言葉に反応したらうれしかったのか満面の笑みでこっちをみた。
ヘンな気持ちじゃなくて、なんだか無性にうれしかったんだ。

今まではオレを『番長』やらでしか見てくれなかった友達が、コイツはオレを『都築庵』としてみてくれてるってね。

ソイツのおかげで、目が覚めて遅い受験勉強に入った。
なんとかＡ判定を貰って、喜んでいるのもつかの間だった・・・・おれは、ソイツの危機を感じられなかった。

それから３日後。彼は死んだ。

昔から心臓が弱かったらしかった・・・・そうとう無理をしていたらしい。
本当ならば、この１ヶ月は病院で療養していなければいけなかったのだが、遺り残したくない事があるからと言って

毎日学校に行っていたらしい。そいつの最後の顔はあまりにも安らか過ぎて・・・今でも忘れられない。
それが本当に死んでいる顔なのか？って聞きたくもなったよ。

ソイツの母親にこう言われた。
「あなたと友達になれてよかったっていつも言っていたわ。あの子の事を忘れないで。
　でも、それがあなたにとって重荷になるのならば・・・その時は忘れてしまってもかまわないわ。
　その方が、あの子も喜ぶわ、きっと・・・・きっと」

Ａ判定だった学校を受験するのはやめて、自分の好きな道に進もうと決めた。
吹奏楽がやりたい！それだけで、オレはこの学校を選んだ。

悔しいけれど、今の今までソイツの事忘れてたよ。

「先輩・・・・・泣いてるんですか？」
ベットに横たわりながらそう声をかけた。すると、起きてたのか？と慌てて声を返した。
「あぁ・・・泣いているのかな？よくわかんないや・・・・お前も、そうだろ？」
「先輩の話、聞いていたら私はまだ幸せなんだなぁって思いました」
「え？」

「私には親も、妹も、友達もたくさんいます。でも、今まで得たものは多くても無くしたものはないんです。
　だから、先輩よりも私は幸せなんだなぁと思いました。あ、でも先輩は今は幸せなんじゃないんですか？」
「あぁ・・・そうだな」

お互いの顔を見ながら、笑った。
二人共、背負ってしまった過去は暗くて思い出したくもない物なのかもしれない。
でも、その過去があってこそ今があるんだと再確認した・・・・・・のかも。

「そうだ。お前、泣きたくなったらオレ呼んじゃえよ？わかった？」

そう言った都築先輩の顔が、昔の記憶とダブった。

どうしよう。

始まって終わるもの。

「そうだ。お前、泣きたくなったらオレ呼んじゃえよ？わかった？」

コンクールなんてどうでもよくなってた。私は客席で都築先輩の演奏を聞きながら心では
そう思っていた。あの言葉、前に夢に出てきた男の子とかぶるのはなぜだろう？？
小さい頃なんて、都築先輩と遊んだ記憶なんてこれぽっちもないのに・・・・・。

あれは都築先輩なのかなぁ？？？

「じゃー今日は現地解散ってことで！！」
軽快なしゃべり口調で部長が話し始める。コンクールの内容なんてこれっぽっちも覚えてない。
「ミチル！！明日、部活お休みなんだって。久しぶりに遊びに行かない？？」
「ごめん・・・・そんな気分になれないや・・・」
メグからのお誘いも断った。でも、やっぱりそんな気分になれるわけもなかった。
一人で家路についた。

今日会ったこと。
慎ニに会ったこと。

それはまぎれもない事実。都築先輩に助けてもらったのも事実。

もしかしたら、自分を変えてしまういいチャンスなのかもしれない。
今までの自分を切り捨てて、部活にも恋愛にも生きてみようか？
過去は過去、未来はこれからくるものだから。今、できることは今すべきこと。
そう思ったら、なぜだか心は急に軽くなった。今すぐにでも部活に行きたくなった。

部活は休みだから、都築先輩に会うことなく一日が終っていた。
なぜだか寂しい。
メグと二人、歩いていた。校門に違う制服を着た学生が立っていた。誰かを待っているみたいだった。

慎ニだった。

一瞬足が止まった・・・・でもこのことをメグには悟られたくはない。
だって・・・だって・・・私は昨日『自分を変える』って決めたんだ。自分で歩かなきゃ。
校門近くに差し掛かった時に、向こうが私の存在に気づいた。
「ミチル・・・・・ちょっといいかな？」
でもやっぱり、恐怖心は取り除けるわけでもなくて・・・・足はガクガクだし血の気が引くのがわかった。

無視をして進もうとしたら、腕をつかまれた。
あの時の記憶が蘇って、思わず振り払ってしまった。
「やめてよ！！学校まで来てなんなの？？もう、やめてよぉ・・・・」
なきそうだった。その場に座り込んでしまいそうだった。
「ミチル・・・話を聞いてほしいんだ。今までのことを誤りたいんだ・・・・・」
その言葉に驚いた。彼の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかったから・・・。
「え？誤りたいって・・・どういうこと？」

そういうと彼は話し出した。
高校に入ってから、自分が私にしていた事を何度も何度も悔やんだってこと。
誤っても許してもらえないかもという不安な気持ち。そして何よりも、自分には今彼女がいるということ。
私にしたことはぬぐいきれることじゃないかもしれない、でも彼も一歩前に進もうとしていた。
彼自身も苦しんでの結果だったのかもしれない。あの当時彼は、そういう形でしか人を愛せなかったのかも。
そんな彼を前にして、私は何が言えるだろう？？？

「お互い、苦しんだよね？もう、苦しまなくてもいいのかな？」
「あぁ・・・お前も早くいい人見つけろよ」
そう言って、私に耳打ちをした。

「お前を助けた先輩、かっこよかった。あの人にもありがとうって言っておいて」

なぜだかその言葉を言われたときに胸が熱くなった。

そしてやっと、中学生から高校生になれたそんな感じがした。
季節は冬になりかけてきていた。

なんだかんだいって、冬本番って感じの季節がやってきた。
私自身はその季節とは反対で、妙にすがすがしい・・・そんな気持ちになっていた。

３年の先輩達が引退ってことで、部ではお別れパーティーをやる準備に追われていた・・・。
「ねー４５小節目のところ、ピッチ合わせしたっけ？？」
「あーやべぇ！！譜面がないんだけど！！！」
「ぎゃぁぁぁ！！！」
先輩を安心させて送り出そうという企画なのに、私達は慌ててばかりいた・・・。
つまり、先輩が引退してしまうなんてことを考えたことがなかったもんだから・・・・。

都築先輩はというと・・・・のんびり窓の外の景色を眺めていた。

「ちょっと！！庵？？？あんた一人、楽はさせないわよ？？ほら！そこのピアノ運んで！！」
そう、渇をいれたのはもちろん雫先輩だった。私も声をかけようかと迷ったけれど、どうやら先を越されたみたいだった。私は忙しさでなんとか誤魔化そうと両手に譜面を抱えて、コピー室へと急いだ。

ピーーーガァァア・・・・・・・
「えぇーっと・・・・これで、よしっ！！」
コピーされた譜面の枚数を数え、音楽室に戻ろうとしたら・・・・・。
ドアの窓に人影が写っていることに気づいた。そこにいたのは・・・都築先輩だった。
ドアを開けて、覗き込んでみたら「よぉっ」とかいって、荷物を持ってくれた。
どうやら雫先輩に言われて手伝いに来たらしい・・・そりゃ、ピアノ運ぶよりはこっちのほうが楽ですから。

「お前さ、アイツにあったんだって？メグちゃんに聞いた」
「あ・・・・はい。でも、もう大丈夫ですから！！！あ、彼が先輩にありがとうって・・・」
「ふぅーん・・・・そっか。ならいいや」
一体、何を言いたかったんだろうか？それから先、二人の間には会話はなくて無言で足を音楽室へと
向わせていた。そして、音楽室の前に来ると都築先輩がふと足を止めた。
何事？と同時に彼に、ぶつかりそうになってしまった・・・・。
「うわっ・・・・ど、どうしたんですか？？急に」
「いや・・・お前さ一今、好きな奴とかっているの？」

あまりにも突然すぎて、言葉が思いつかなかった。数秒後。出てきた答えが・・・

「いません。でも、気になってる人はいると思います」

その答えに満足だったのか、笑顔で「そうか」といいながら音楽室へと入っていった。
一体、先輩は何が聞きたかったのか未だにわからない。
なんとか準備も整って、３年の先輩達と楽しく過ごした。引退は寂しいけれど・・・・・・・。
そしたら急に部長先輩が私にこう言った。
「ミチルちゃん。楽器は吹けるようになったかい？」
意外な質問っていうか、答えがわかっているのに聞くのもどうかと思った。
「え？何を急に・・・吹けませんよ、きっと」
「君はそれでいいの？吹けないままでいいの？？」

それじゃ・・・この部活に入った時と同じじゃない・・・私。

「え・・・・・そ、それは・・・」
「吹いてみなよ。ボク達の引退の記念ってことで」
その話を聞いていたメグが、楽器を差し出してくれた。それはクラリネット・・・・。
吹けないだろうという気持ちと、もしかしたら音が出るかもしれないという期待・・・。
でも、私の中では不安の方が大きかった。
マウスピースを口に近づける。自分の唇が震えているのがわかった・・・・。
最初、息を吹き込んだときは音は出なかったけれど・・・・二度目・・・かすかにだったけれど音がでた。
部員のみんなが一斉に拍手をしてくれた。

「ミチルゥ〜！！！出たじゃん！！やったぁぁあ！！！」
「ミチルちゃんっ！！ズルイぃ〜！！」
メグも雫先輩も私の頭をなでて、喜んでくれた。もちろん部長先輩も・・・・。
なんだか、やっとだけど部の一員になれた、いや溶け込めた感じがした。

「やったじゃん。おめでと」

そういって近づいてきた、都築先輩の笑顔を見て心底、この部活に入ってよかったって思った。

来年の４月には新入生が入ってくる。

それまでに私は、クラリネットを完璧に吹けるようにしなければならない。
猛特訓って言って、スパルタな練習が毎日行われていた。

先生はもちろん・・・・。

私の高校生活は２年目に突入しようとしていた。